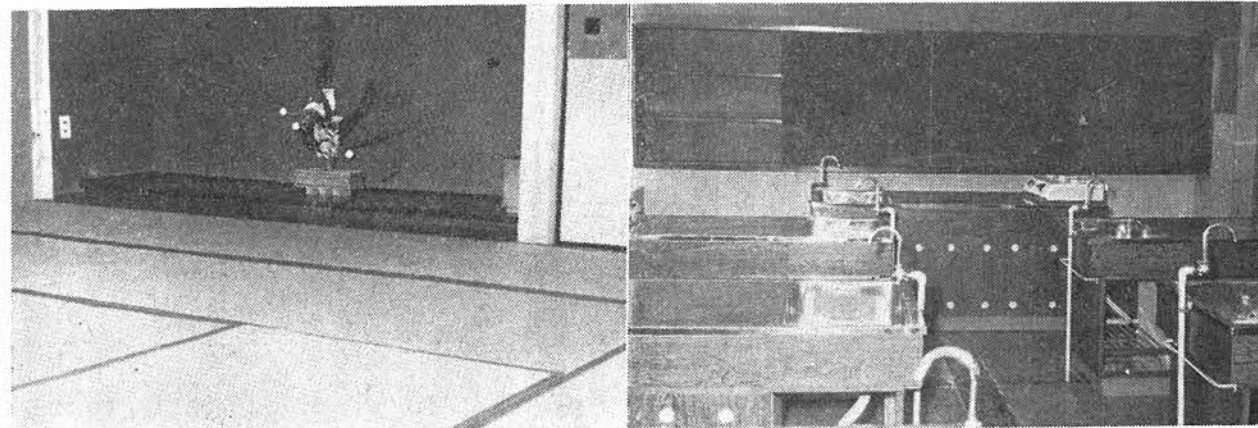




調理室 七台の調理台が二列に並んでいる。料理講習、栄養教室も結婚式の料理もここで行う。



(公民館全景)

千代塚に「のぼり」

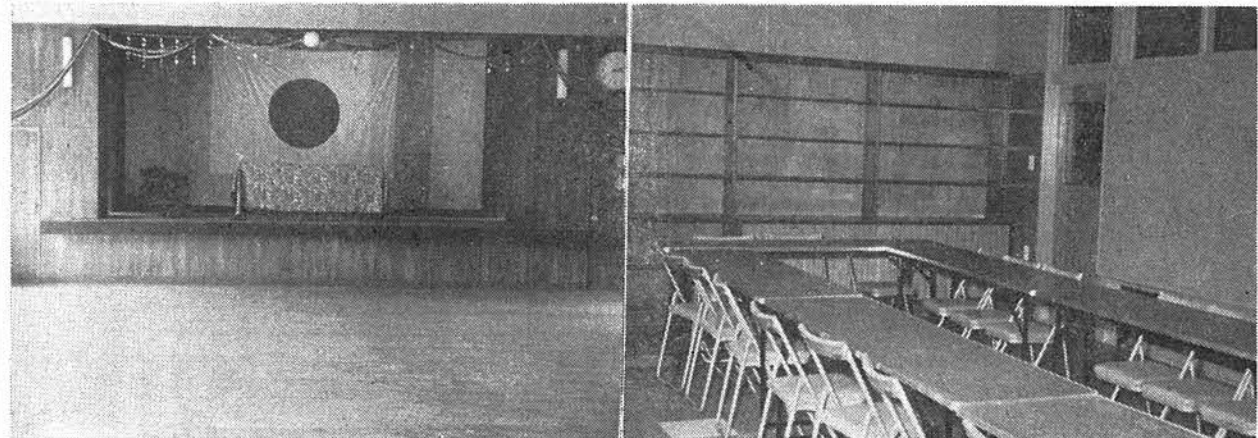
毎年の千代まつりに櫻倉代にお金を贈ってくれている石田昭を奉納した。町長さんや役場公民館の人たちも、いつも羨らぬ石田英君が、こんどは「孝女千代の墓」と染めぬいた大きな（節句の）君の篤志に感心している。

公民館運営審議委員

昭和四十年年度津奈木町公民館運営審議委員は次の通り

福村 広人	松原 兼義
福島 峯雄	溝口 康世
田村 正	福島 季任

西	釜	志崎	国武
保馬	忠彦	鳥末	保
千々岩頼母	齊藤たま	田上一智	山崎好
以上十五名	緒方洋		



図書室 書物を入れていない前は会議室に使った。
ゆくゆくは郷土に関係あるものをも陳列する

千代塚につつじ

津奈木婦人会では、かねて千代塚が国道三号線開通によってクロースアップされたため、美化しようというところで、四月二十三日、二百本あまりのつつじ苗を千代塚の周りに植えた。(苗代、三万余の円も婦人会の財産から出した。)

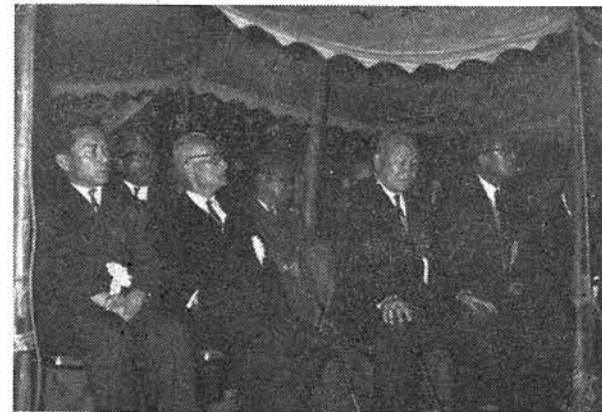
公民館日誌

(五月分)

- | | |
|-----|---------------------|
| 二日 | 結婚式 |
| 六日 | 鐵道用地關係者會 |
| 七日 | 選舉管理委員會 |
| 八日 | 農業委員會議員總會 |
| 一〇日 | 農協職員會 民生委員會 |
| 一二日 | 柑橘同志會 生ブクチン |
| 一三日 | 婦人役員會 |
| 一四日 | 結婚式 果樹經營打台會 |
| 一五日 | 交通安全協會總會 |
| | 故斎藤寛氏法要 |
| 一七日 | 區長會 |
| 一八日 | 上棟式 |
| 一九日 | 遺族會役員會 |
| 二〇日 | 森林組合總會 |
| 二一日 | 教育委員會 遺族理事會 |
| 二二日 | 津小研究会 |
| 二四日 | 身体障害者會 |
| 二五日 | 榮獲教室 |
| 二七日 | 土木委員會 體育指導委員會 農協理事會 |
| 二八日 | 町議會 |
| 三〇日 | 津奈木小PTA總會 |

海よ！ さよなら

汐止とは？



海のただちに堤防をきずいて、これまで海水の出入を自由にしてあった門をとし、海水が一灌も堤防内に入らないようにする作業が汐止である。

この汐止によって、永久に海とお別れて陸地に衣がえするのである。

何万年か何十万年か知らないが海であったところが陸地に変わるのだから、口にいふほど簡単なことではない。おそらく海神はもとの海に取りもどそうとサツキになっていられるだろうし、人は海にもどしてたまものかこ一生懸命だろう。おたがいの戦いがこれからさき続くことだろう。

そんなことを考えると汐止式も厳しゅうならざるを得ない。

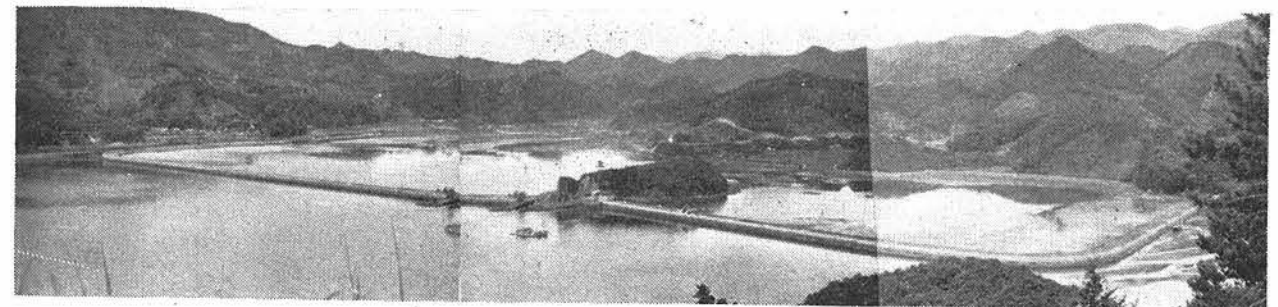
汐止式

汐止式

昭和四十年三月二十三日、この日のためにあらゆる困難とたたかてきたともいえる。式は止める現場の横の堤防の上で午前五時から、電灯の光のもとで行われた。前村長谷藤藤吉氏の写真の前で寺本知事や九州農地局長など多数来賓臨席のもとに、この干拓がとこしえに安泰であるように、本町がいや栄えに栄えるようにと願いをこめて。

汐止作業

海水が自由に出入りしていた門は、がんぢなコンクリート柱によって十四に区切られている。ここはその一しきりについて説明してみよう。先ず十七センチ位の角材を下から一列に二十六本積み上げ、その端目には板を釘づけして水の入るのを防ぐ。更に土壁三二〇センチを内側に下ほど広く積んで角材を補強する。その上にサンドボンプで泥水



を送ってスキマをなくする。

こが終るころには汐も満潮となり、作業員もホリとする。なにぶん世紀の仕事ではあり、汐の間の作業であるため関係者の緊張は大したもの、声も高くなり、荒れながらもあたりまえ、喜びと疲れが一しょにきて、ドツかと腰をおろす。

先生の異動：

左の先生方が転出されました。	葛渡中へ	平野文弥	津南中
水い間お世話になりました。厚く	次の先生方が本町に来て下さいまし		
御礼申しあげます。(敬称略)	した。よろしくお願いいたします		
平国小へ	山口勝郎	津奈木小	津奈木小
久木野小へ	山口勝利	"	緒方公
湯浦小へ	岩不勇夫	"	西直躬
水俣三小へ	洲上輝子	"	坂上慶子
ろう学校へ	谷口多恵子	"	岩本紀子
八代千丁へ	樋口ヒサエ	"	一森悦子
湯浦中へ	都田新一	赤崎小へ	酒井義弘
津奈木小へ	西直躬	"	大重昭雄
湯浦小へ	岩本立子	"	天草内之原小
白木小へ	寺本剛	平国小へ	西野雅子
湯出小へ	本郷容弘	"	山口勝郎
佐敷中へ	藤田享	津南中へ	中道竜蔵
			水俣二小
			古川清澄
			水俣三中



汐止式角材落しの儀

万円、負担別になると、国費二億三百万円、県費六千百万円、町費は四千百万円。どれだけのお米がとれるか、米以外の作物もお米に換算すると約四千百俵になつてゐることである。

左手も使おう

人には左右二つあるものは、平均して使われている。眼、鼻の穴、左右の足然り、しかし手だけはそうでない。左きき右ききとあるのはそれ、これを心がけて同じように鍛へば、握力、押す、引く、投げる力は同じようになる。同じであればわれわれの生活にプラスすることが多い。野球、自動車運転等。